

令和元年5月28日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H02584

研究課題名(和文) 高齢者ケアの継続・連携に関する質指標開発とシステム構築

研究課題名(英文) The development of quality indicators and the building of a system pertaining to continuation and collaboration in the field of elderly care

研究代表者

正木 治恵 (Masaki, Harue)

千葉大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：90190339

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 24,500,000円

研究成果の概要(和文)：超高齢社会に対応する高齢者ケアの継続・連携に関する質指標を開発し、それを具現化するシステムを構築することを目的に、日本の高齢者ケアの現状に即した継続・連携に関する質指標とそれを具現化するための看護師のコーディネート機能実践ガイドを完成させた。また、患者中心の医療・介護・健康増進を実現する情報共有システムとして開発された地域連携・情報共有アプリについて、高齢者本人の視点から評価し、その活用可能性と課題について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で作成した高齢者ケアの継続・連携に関する質指標や、それを具現化するための看護師のコーディネート機能実践ガイドは、複数の疾患や障害を併せ持つ高齢者が、生活の場を自宅、医療施設、ケア施設等と移動しながらも、一貫した包括ケアを享受できるための一助となる。それは単に医学的な治療を継続することにとどまらず、高齢者が望む在り方・望む生活を営むためのケアの質保証となる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop quality indicators and for continuity and coordination of care in elders and to establish the system embodied the quality corresponding to the super-aged society. We completed quality indicators for continuity and coordination in line with the current situation of elderly care in Japan, and identified nursing actions in hospital settings to improve collaboration between healthcare professionals and the continuity of care for elderly. In addition, we evaluated the patient-centered developed system for regional collaboration and information sharing application from the viewpoint of the elderly person and clarified its application possibilities and issues.

研究分野：老年看護学

キーワード：高齢者ケア 質指標 連携 コーディネート機能 ITシステム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

高齢化率 25.1%を超えた我が国において、認知症や慢性疾患を患う脆弱高齢者は急増しており、多死時代にも直面している。特に医療・介護ニーズの高い後期高齢者の増加が著しく、それに伴い医療費の高騰、医療を提供する人材の不足が大きな課題となっている。そのような社会情勢に対応すべく、2014年には社会保障制度改革国民会議報告書に基づいた医療介護総合確保促進法が成立した。その中では医療から介護まで一貫した提供体制改革を主眼に、地域の関係者によるネットワーク化・連携を通じた改革が求められている。

この改革を実現するために必要な知の蓄積について概観すると、米国において高齢者ケアの継続・連携のための質指標が作成されているものの(N.S. Wenger, 2007)、医療・ケア提供システムが大きく異なる我が国独自の質指標はみられていない。また、多職種チームによる高齢者総合機能評価(Comprehensive geriatric assessment)が普及しているが、各施設を超えて活用されるには至っていない。ITによるネットワークシステムも各地で種々開発されているが、異なる目的を有する各施設が共有すべき情報が何かについて、十分な検討には至っていない。

米国の研究において、単一の慢性疾患に対応する既存の診療システムの弊害を克服しようと、PCMH(patient-centered medical home)プライマリーケアモデルに基づくパイロットスタディを実施し、一定の効果を果たしたことが報告された(B. Trehearne, 2014)。ここではチーム医療を促進する外来看護師のコーディネートを中心とする役割機能が重視されている。

高齢者が治療または療養する場が、病院、施設、在宅など様々であることを見据えると、どのような場であろうと、一定の質が担保されたケアの継続が望まれる。すなわち、高齢者や家族が意向を尊重されながら一貫したケアを継続して受けられる体制の構築が求められているといえよう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、超高齢社会に対応する高齢者ケアの継続・連携に関する質指標を開発し、それを具現化するシステムを構築することである。構築するシステムは、複数の疾患や障害を併せ持つ高齢者が、生活の場を自宅、医療施設、ケア施設等と移動しながらも、一貫した包括ケアを享受できるものとして開発する。本研究は、看護学ならびに医学研究者が臨床の多職種チームから構成される実践者と共同し、以下の三点を明らかにする。

- (1) 高齢者のQOLと生活機能を支えるケアの継続・連携の質指標(Quality Indicator)の策定
- (2) 地域ITネットを活用したケアの継続・連携情報共有システムの確立
- (3) チーム医療を促進する看護師のコーディネート機能の開発

3. 研究の方法

(1) 研究1. 高齢者ケアの継続・連携に関する質指標(QI)の作成

海外で作成されたQIの代表的なものである、米国の高リスク高齢者医療の質を測定するための第3次ACOVE(Assessing Care of Vulnerable Elders)プロジェクトQI ASSIST(Addressing Symptoms Side Effects and Indicators for Supportive Treatment)を参考に、国内外の関連論文と日本の専門学会や行政等が発行するガイドラインや指標を収集し、ベスト・エビデンスに基づいて根拠を要約し、日本の状況に合う質指標の項目案を作成した。専門家による会議(看護職および他職種の専門家から成る専門家パネル会議)を経て、質指標案を作成した。

作成した質指標案を様々な臨床の場で実践している他職種(医師、薬剤師、ケアマネジャー、地域包括支援に従事する行政職)6名に評価を依頼し、質指標の妥当性の検討と洗練を図った。

(2) 研究2. ITネット情報共有システムの確立

患者中心の医療・介護・健康増進を実現する情報共有システムとしてA病院で開発された地域連携・情報共有アプリSHACHI(Social Health Assist CHIba)を活用した。患者自身がスマートフォンもしくはタブレットにアプリをダウンロードして利用登録し、患者が入力した内容や主治医が閲覧を許可した診療情報は患者が許可した家族や専門職者間でも共有できる。また、地域の医療機関や薬局、訪問看護ステーションは、患者の許可を経て病院と連携することができる患者主体の情報共有・地域連携システムである。

A病院受診中の65歳以上の患者のうち、既にSHACHIに登録し研究への参加に同意した10名(66-78歳)を対象として半構成的面接を行い、内容を録音し逐語録を作成した。調査期間は2017年11月~2018年3月、質問はSHACHI登録のきっかけ、情報管理の実際等についてであった。分析は、逐語録から活用の実態と困難感、課題・改善策と利点・期待・将来展望に関する内容を抽出し、意味内容の類似でカテゴリーを生成した。

(3) 研究3. 看護コーディネート機能の能力の抽出

看護師と連携している他職種からみた看護師のコーディネート機能の抽出

都市部2か所、地方2か所の大学病院に所属している他職種(医師、理学療法士、薬剤師、MSW、リエゾン、地域連携室看護師)10名を対象に、複数の疾患や障害を併せ持つ高齢者が急性期病棟の病棟や外来と地域間で療養の場が移動するにあたり、必要なケアを継続するために看護師

と連携した実践内容、および看護師に求めるコーディネートに関するナラティブデータを収集し、質的統合法（KJ法）を用いて分析した。

看護師のコーディネート機能の抽出

都市部3か所、地方3か所の大学病院に所属している看護師16名、医師・理学療法士・薬剤師・MSW等他職種10名を対象に、半構成的面接にて、「看護師が他部署や他施設、他職種と連携して必要なケアを継続した実践内容」についてデータ収集し、質的統合法（KJ法）を用いて分析した。

看護師がコーディネート機能を発揮できるよう支援する実践ガイド（以下、実践ガイドとする）の開発

「チーム医療を促進する看護師のコーディネート機能」の各項目を、実践ガイドとして適切な表現・順序となるようC. Alexanderのパターンランゲージを参考に整理・構成し、実践ガイド案を作成した。研究対象看護師10名が、重要性・明瞭性・適切性、活用可能性などの観点から妥当性を評価し、評価内容を実践ガイド案に反映させて、実践ガイドを開発した。

4. 研究成果

(1) 研究1. 高齢者ケアの継続・連携に関する質指標（QI）の作成

16項目から成る高齢者ケアの継続・連携に関する質指標を策定し、論文公表の準備中である。

(2) 研究2. ITネット情報共有システム

SHACHI 活用の実態と困難感

SHACHI 活用の実態として、[SHACHI 以外に継続している情報共有方法を既に持っている][家族との情報共有を希望する人としていない人がいる][体重や血圧を入力している][自分の体調や巧緻性により使用状況が左右される][他機関との SHACHI を活用した情報共有の可能性を確かめる][自分の体調やデータを管理するためにさらなる工夫をする][メリットを実感している][活用していない] の8つが、活用に伴う困難感は、[入力に手間取る][慣れ親しんだ情報管理方法の変更や追加が難しい][今の複数疾患を併せ持つ身体では使いこなせない][活用には他者の支援を得なければならない] の4つのカテゴリーが生成された。SHACHI を活用する高齢者は慣れ親しんだ情報共有方法を既に持ちデータを管理するための工夫を自ら行う一方で、自身の体調や巧緻性により使用状況が左右される実態があった。

SHACHI の課題・改善策と利点・期待・将来展望

SHACHI 機能の課題と改善策には [入力機能][表示・閲覧機能][共有機能][機器・インストラクション] の4つが、高齢者が想定する SHACHI の利点・期待・将来展望には [多機関の連携促進と高齢者の情報共有に役立つ][病院の利益も追求できる][ペーパーレス化の時流に合っている][希少疾患等新たな治療開発のための臨床研究が推進される][医療情報は患者のものであるという理念に賛同する][段階的な普及が予測される][さらなる機能拡大を期待する][SHACHI を活用できる人が私の他にもいるはず] の8つのカテゴリーが生成された。SHACHI の機能の課題と改善策として、媒体や情報の自己管理に関する内容が主に抽出され、SHACHI 導入初期段階であることと、対象者には情報共有システムに親和性の高い背景を持つ高齢者が含まれたことが考えられた。SHACHI の利点・期待・将来展望の内容から、高齢者による SHACHI 活用促進の可能性が示唆された。

(3) 研究3. 看護コーディネート機能の能力の抽出

他職種からみた看護師のコーディネート機能の抽出

分析にはラベル165枚を用いた。7段階に渡ってラベル編成を繰り返し、最終的に6つのシンボルマーク；【掘り下げ受けとめた本人・家族の思いやニーズの伝達】【各々の専門性を生かすヒントになる先眼力と行動】あらゆる問題の本質の掘り下げと意味を理解した交通整理と肩代わり【予測される不応への先手の対応・準備】【中心に入っての実現可能性に向けた調整と伝達】【チームの一員として一端を担う在り方の保持】【ズレやギャップを少なくし、同じケアを目指す姿勢】を導いた。他職種からみた看護師のコーディネート機能は、福祉面でも医療面でも問題が絡み合う現状で、よりその役割が高く発揮されていた。医師にも患者・家族にも多職種にも近い立ち位置にいる特性を活かし、「絶え間ない観察によるキャッチ」「問題の掘り下げ」「噛み砕いた伝達」「患者・家族への手技指導」「知識や患者の反応に基づく予測」「手技習得度の評価」を行うことでチームおよび患者・家族にとって円滑かつ安心感のあるケアの移行につながっていた。また、看護師のコーディネート機能は、専門看護師の役割の一つとして位置づけられているが、一般看護師においても発揮していることが明らかとなった。これらは他職種とは異なる、看護師としての特性から活かされたコーディネート機能と考えられた。

チーム医療を促進する看護師のコーディネート機能の抽出

分析にはラベル299枚を用いた。多段ピックアップにて155枚となったラベルを7段階に渡ってラベル編成を繰り返し、最終的に6つのシンボルマークを導いた。看護師のコーディネート機能には、【日頃の関わりから患者の望みや価値観を感性で捉え支える】機能が「他職種を含

めたケア実践への動力」として、また、【多角的視点での情報収集・現状判断と予測からの舵取り】をする機能が「他職種との連携・調整への動力」として、中核になり機能していた。そして、その「足固め」として、【互いの専門性の尊重と担当領域の見定め】が「よりよい連携に向けて」機能し、【患者の全体像やケアの方向性一致（集約）への働きかけ】もまた「高齢者の生き様を尊重したケア実践に向けて」機能していた。さらに、看護師は「システム環境への調整」として【伝達をスムーズにするための手段やルートの構築】という機能を担ったり、「患者をとりまく環境への調整」として【介護者へのケアや関係調整、地域住民への啓蒙】という機能を担っていた。

実践ガイドの開発

実践ガイドは[高齢者ケアの継続促進]と[他職種との連携促進]の2側面から構成され、「足固め-動力-調整」へと発展する機能を示した。すなわち「A.高齢者の生き様を尊重したケア実践に向けた足固め」「B.他職種を含めたケア実践への動力」「C.患者をとりまく環境への調整」からなる[高齢者ケアの継続促進]の側面と、「D.よりよい連携に向けた足固め」「E.他職種との連携・調整への動力」「F.システム環境への調整」からなる[他職種との連携促進]の側面で、2側面それぞれは、高齢者もしくは他職種に対する理解を深め集約していく「足固め」と、目標達成に向けてチームの舵をとっていく「動力」、高齢者もしくは他職種を繋ぐ環境を整えていく「調整」の機能を表すものとなった。なお、研究対象看護師による妥当性の評価では、一部表現に課題が示されたものの、重要性、明瞭性、適切性共に4.0以上と高く研究対象者の8割からスタッフ育成に活用できるとの評価が得られた。今後は教育的に活用していくことが課題である。

以上より、作成した高齢者ケアの継続・連携に関する質指標や、それを具現化するための看護師のコーディネート機能実践ガイドは、複数の疾患や障害を併せ持つ高齢者が、生活の場を自宅、医療施設、ケア施設等と移動しながらも、一貫した包括ケアを享受できることを可能にするための一助となると考えられた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計9件)

石橋みゆき、山下裕紀、永田文子、藤田伸輔、井出博生、正木治恵：高齢者による地域連携・情報共有アプリの活用状況 SHACHI 活用の実態と困難感、第38回日本看護科学学会学術集会、2018/12/16、愛媛(松山)

山下裕紀、石橋みゆき、永田文子、藤田伸輔、井出博生、正木治恵：高齢者による地域連携・情報共有アプリの活用状況 SHACHI の課題・改善策と利点・期待・将来展望、第38回日本看護科学学会学術集会、2018/12/16、愛媛(松山)

松本啓子、正木治恵、河井伸子、石橋みゆき：在宅高齢者のケア継続を視野に入れた地域連携に関する文献検討、第44回日本看護研究学会、2018/8/18、熊本

小林由佳、石川崇広、新井さやか、加藤尚也、菅谷修平、中村貴子、鈴木貴明、石井伊都子、大鳥精司、横手幸太郎：病棟薬剤師と高齢者医療センターによる高齢ポリファーマシー患者への処方検討、第60回日本老年医学会学術集会、2018/6/16、京都

石川崇広、新井さやか、加藤尚也、今井正太郎、村山紀子、浅見 勇太、川崎瑞穂、越坂理也、前澤善朗、横手幸太郎：外来高齢糖尿病患者におけるポリファーマシーの実態調査、第60回日本老年医学会学術集会、2018/6/16、京都

今井正太郎、石川崇広、加藤尚也、浅見勇太、新井さやか、村山紀子、川崎瑞穂、天田裕子、村田淳、横手幸太郎：当院高齢者医療センターによる在院日数およびリハビリテーション導入率の調査、第60回日本老年医学会学術集会、2018/6/14、京都

大原裕子、河井伸子、正木治恵、坂本 明子、黒田久美子、石井優香：高齢者ケアの継続・連携に関するチーム医療を促進する看護師が行っているコーディネート機能、第37回日本看護科学学会学術集会、2017/12/16、宮城(仙台)

Harue Masaki、Nobuko Kawai、Keiko Matsumoto、Mika T. Musgrave、Yuki Yamashita、Kazuki Kobayashi、Takahiro Ishikawa、Koutaro Yokote：Development of Quality Indicators for Continuity and Coordination of Care in Elders in Japan, 21st IAGG World Congress on Gerontology and Geriatrics (IAGG2017), 2017/7/23-27 San Francisco

坂本明子、正木治恵、大原裕子、黒田久美子：他職種からみた高齢者ケアの継続・連携に関するチーム医療を促進する看護師のコーディネート機能、第36回日本看護科学学会学術集会、2016/12/11、東京

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：石橋 みゆき

ローマ字氏名：ISHIBASHI, miyuki
所属研究機関名：千葉大学
部局名：大学院看護学研究科
職名：准教授
研究者番号（8桁）：40375853

研究分担者氏名：黒田 久美子
ローマ字氏名：KURODA, kumiko
所属研究機関名：千葉大学
部局名：大学院看護学研究科
職名：准教授
研究者番号（8桁）：20241979

研究分担者氏名：大原 裕子
ローマ字氏名：OHARA, yuko
所属研究機関名：国際医療福祉大学
部局名：成田看護学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：10782146

研究分担者氏名：河井 伸子
ローマ字氏名：KAWAI, nobuko
所属研究機関名：大阪大学
部局名：医学系研究科
職名：講師
研究者番号（8桁）：50342233

研究分担者氏名：松本 啓子
ローマ字氏名：MATSUMOTO, keiko
所属研究機関名：川崎医療福祉大学
部局名：医療福祉学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：70249556

研究分担者氏名：横手 幸太郎
ローマ字氏名：YOKOTE, koutaro
所属研究機関名：千葉大学
部局名：大学院医学研究院
職名：教授
研究者番号（8桁）：20312944

研究分担者氏名：石川 崇広
ローマ字氏名：ISHIKAWA, takahiro
所属研究機関名：千葉大学
部局名：医学部附属病院
職名：特任助教
研究者番号（8桁）：00749426

研究分担者氏名：小林 一貴
ローマ字氏名：KOBAYASHI, kazuki
所属研究機関名：千葉大学
部局名：大学院医学研究院
職名：特任講師
研究者番号（8桁）：30400998

研究分担者氏名：鈴木 隆弘
ローマ字氏名：SUZUKI, takahiro

所属研究機関名：千葉大学
部局名：医学部附属病院
職名：准教授
研究者番号(8桁)：40323422

(2)研究協力者

研究協力者氏名：小池 潤
ローマ字氏名：KOIKE, jun

研究協力者氏名：今井正太郎
ローマ字氏名：IMI, shotarou

研究協力者氏名：新井 さやか
ローマ字氏名：ARAI, sayaka

研究協力者氏名：山口 梨沙
ローマ字氏名：YAMAGUCHI, risa

研究協力者氏名：田中 久美
ローマ字氏名：TANAKA, kumi

研究協力者氏名：林 弥江
ローマ字氏名：HAYASHI, yasue

研究協力者氏名：山下 裕紀
ローマ字氏名：YAMASHITA, yuki

研究協力者氏名：坂本 明子
ローマ字氏名：SAKAMOTO, akiko

研究協力者氏名：永田 文子
ローマ字氏名：NAGATA, ayako

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。